

令和2年10月29日

中央教育審議会初等中等教育分科会  
新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会長 様

全国連合小学校長会長 喜名 朝博

**「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、  
個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中間まとめ）への意見**

はじめに、これまで中央教育審議会初等中等教育分科会が、「新しい時代の初等中等教育の在り方について」について熱心に審議を続けてこられてことに対し敬意を表します。奇しくも新型コロナウイルスは、先行き不透明な時代の到来を現実のものとししました。このことにより、学校は改めてその存在意義を確認するとともに、学校の当たり前を問い直すこととなりました。合わせて小学校においては、新学習指導要領の全面実施、学校における働き方改革の推進、GIGAスクール構想の前倒し等、様々な課題に直面しています。これらの課題を解決していくためにも、答申がより実効性のあるものになることを期待し、本中間まとめについて、下記の通り意見を申し上げます。

記

**1 これまでの教育改革の総括を行うこと**

時代の流れが加速し、社会が大きく変化していく状況にあって、学校運営や教育の内容・方法についても、その流れに応じて変化していくべきものと考えます。しかし、これまでの教育課程や様々な教育施策の精細な総括なしに教育改革が進んでいくことは、新たな理念が浸透しないばかりか、ビルド&ビルドにより学校はますます疲弊していきます。学習指導要領の定着状況の把握、教員勤務実態調査等のエビデンスに基づく具体的な改善が必要です。本中間まとめにおいても、日本型学校教育の課題が整理されていますが、その抜本的な解決策は示されておらず、課題を残したまま「令和の日本型学校教育」を進めていくことは、これまでと同じ轍を踏むこととなります。時代が求める教育改革の前提として改めてこれまでの教育改革を総括し、その反省に基づく施策を実現されることを強く希望します。

**2 新学習指導要領との関係性の明確化**

新学習指導要領は、主体的・対話的で深い学びを視点とする授業改善を求めています。新型コロナウイルス感染症防止のため様々な教育活動が制限される中であっても、学校は新学習指導要領の理念の実現に向けて努力しています。一方、本中間まとめでは、個別最適な学びと協働的な学びの往還や履修主義・修得主義等を適切に組み合わせるといった新たな取り組みを求めています。どちらも教育課程や授業作りの根幹をなす考え方であり、主体的・対話的で深い学びとの関係を明確にしなければダブルスタンダードになってしまいます。

G I G Aスクール構想により多様な学び方も始まります。これからの時代に必要な資質・能力の育成を目指す新学習指導要領の理念を実現するためにも、本中間まとめと学習指導要領の理念の関係性を明確にされることを強く希望します。

### 3 理念実現のための教育環境の整備

本中間まとめの理念を実現するには、高速大容量通信基盤の整備も含めたG I G Aスクール構想の完全実施をはじめ、様々な教育環境の整備が必須です。これまでの教育改革ではその実現のための環境整備が十分でなく、学校の努力に委ねられてきました。そのことが学校を疲弊させてきたことは前述の通りです。

感染症対策や個別最適な学びの実現には、標準法の改正による30人以下の少人数学級の実現が必須です。このことは学校における働き方改革にもつながるものです。また、本中間まとめの理念は、教員一人一人の授業改善によって実現します。そのためには教材研究等の授業準備の時間を十分に確保する必要があります。小学校においても教員一人当たりの持ち授業時数を設定し、増時数分についての教員加配を行うなどの措置が必要です。先行している高学年の教科担任制の議論もこのことに貢献するものだと考えます。

そして、令和の時代の日本型学校教育を推進するには、優れた人材の確保が必要です。昨今の教員採用の低倍率化は深刻な問題です。職業観の変化により、教師のやりがいを強調するだけでは優秀な人材は集まりません。給特法改正に伴う衆参両院の付帯決議を踏まえ、明確な目標を定めて学校における働き方改革を進め、教員の地位向上、処遇改善について言及されることを強く希望します。

### 4 学校教育の基本に立ち返ること

子どもたちは、教科学習での学び合いや特別活動等における多様な人々との触れあいの中で育っていきます。コロナ禍にあって、子どもたちどうしの関わり合いによる学びの機会が少なくなってしまったことで、その重要性に改めて認識したところです。

昨今のデジタル化の波は、学校運営や授業の質を高めることに貢献するはずですが、一方で、効率化のみに走ることは学校教育の根幹を揺るがしかねません。臨時休業等の非常時に遠隔授業を行うことは、子どもたちの学びを止めないための有効な方策です。また、病気療養中や不登校の子どもたちにとっても、遠隔授業は学びの保障につながります。しかし、前述の通り学校教育は人間どうしの直接的な触れ合いの中で行われるものです。教師が一人一人の子どもの健康状態から心の変化まで把握し、寄り添いながら共に生活することで子どもたちは安心して学校生活を送ることができます。今後、遠隔授業は進めていくべきものと考えますが、教室に教師がおらず子どもたちだけで授業を受けることを推進するような動きは、家庭環境による影響が強くなるばかりでなく、学校教育そのものを否定するものあり、看過できるものではありません。

学校は単なる知識伝達ではなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を育む場です。特に、生きる力となる非認知能力は、人との関わりの中でしか育むことはできません。学習の個別化や個性化は協働的な学びとの往還によって初めて意味をなすものであることを強調し、改めて学校教育の基本である集団で学ぶ意味や意義について言及されることを強く希望します。